2005. 6. 27

瀬戸焼きの歴史と窯垣の小径

6 月 27 日瀬戸の顔としてオープン間もない瀬戸蔵と、陶の路、窯垣の小径を訪ねた。瀬戸焼の歴史を改めて学び、かつその歴史に触れて見る散策は常滑の焼き物の道と比較して興味深かく、また、新たな街づくりを垣間見ることができた。

左が瀬戸蔵、右はバルティー瀬戸

瀬戸 3 万年の歴史を語るミュージアム

瀬戸電が迎えてくれる

瀬戸. 赤津インターを出るとじきに瀬戸の街に入る、パーキングは少ないので直接瀬戸蔵のパーキングに入る。
休日でもなく朝早いので人はまばらにしかいなかった。2 階 3 階がミュージアムになっていて入場料は 500 円であった。まずは旧瀬戸駅と瀬戸電が迎えてくれる。思わず「おっー」驚きと感激が入り混じったような気持ちであった。ここは瀬戸物を輸送する拠点であった、旧瀬戸駅と電車さらには荷物の集積所を再現したものだった。電車に乗ってみると、やはり中は狭いことが実感できた。昔のダイヤ表も掲げられ、改札口もあった。

ギャラリーと生産道具

懐かしい瀬戸電と改札口

店先をイメージした木造のギャラリーと蔵の外観をもつ特別展示室が続く。たくさんの壷やお人形さんがずらりと並び、あでやかな色合い細かな造りは見る者を圧倒する。よくこんなに細かな細工が出来るものと感心する。隣では土を作る、形を作る、焼くという焼き物作りの工程の中で、瀬戸で使われた新旧の道具が並ぶ。でも「ホー」、「へー」とうなずくしかないのがちょっと寂しい。

少し早いお茶の時間

その隣には抹茶コーナーがある。ここには有名な作家が作ったお茶碗がずらりと並んでいる。そのなかの好きなお茶碗で、お抹茶がいだける趣向になっていた。500 円と少しお高いが、そこは有名作家のお茶碗ということで去りがたく、10 時 30 分のお茶の時間には早かったがいただくことに。

すばらしい喫茶コーナーで抹茶をいただく

妻は黒い木の葉という茶碗を選び、私は緑の織部の茶碗を選んだ。でも飲んだお茶の味はよく分からなかった.....。

瀬戸焼の歩み

3階に上がると瀬戸焼の歴史が、分かりやすく整理して展示されている。瀬戸では瀬戸焼の始まりよりもさらに古い、3万年前の昔から人々の暮らしを物語る資料が残されているが、旧石器時代や縄文時代のことはさておき現在の瀬戸焼は1000年余りの歴史があるという。

① 瀬戸で焼きものの生産が始まったのは、平安時代中期と言われる。その時は瀬戸窯ではなく、猿投窯が母胎とされている。
② 尾張藩政下には、瀬戸、赤津、品野、上水野の各村で窯業が再開し特色ある生産がみられるようになる。江戸時代の後期には磁器生産が始まる。
③ 明治に入ると海外向け製品や工業製品など、新分野への対応を迫られコーヒーカップなど洋食器の生産が始まる。
陶磁器は近代化の中で、碍子をはじめとする電気用品、タイルや衛生陶器の生産が盛んになる。
④ 代用品の時代.....日中戦争が始まると家庭用品を金属から陶磁器製に代えた代用品の生産が奨励される。
⑤ 輸出用ノベルティー.....人形や動物の置物をノベルテイーと呼びドイツの生産が途絶えたことで、生産が本格化し一大製品に成長する。
⑥ 美術工芸品として.....明治になって万国博覧会など海外との接触もふえ、輸出品としての役割が加わり家具、装飾、工芸品というジャンルが確立。

このような歴史と品物を見ながら勉強することができた。代用品がこんなにたくさん作られたことは初めて知ったし、胡蝶蘭の作品が陶磁器で作らているのを見ると、こんな物まで造れるのかと感心するしかない。
このあと「陶の路」散策へ向かう。

瀬戸焼きの歴史と窯垣の小径

散策マップを見ると窯垣の小径ともう一つ、陶の路コースのあることが分かった。まずはこのコースの一部を回ることにして、瀬戸蔵をスタートした。

粋な休憩所「無風庵」

川べりに沿って少し歩くと、スマートに生まれ変わった瀬戸電の新瀬戸駅が見える。屋根が曲線になった蒲鉾形スタイルだ。
パルティー瀬戸の手前を右折して路地に入っていくと、路は淡い黄色の舗装が続く。ちょっと急な坂道を登っていくと、茅葺入母屋作りの無風庵が緑の木立の中に見えてくる。この建物は小原村より寄贈されたもので、古い建物を修復して今はギヤラリー兼休憩所として使われている。たしかに釘は使わずに縄でしばって組み立てられているが、肝心な部位にはカスガイを使って

補強していた。一回りしたところで「お茶をどうぞ」と声をかけられた、冷たくておいしいお茶だった。

新瀬戸駅

無風庵

お礼を述べて坂を下りていくと無風庵の駐車場があった、でも 10 台ほどのスペースは通路にも駐車するほど満杯だった。無風庵の客はわれわれだけだったのに。商店街などの駐車スペースが足りないのだろう、でもこれでは観光瀬戸の名が泣くというものだ。

客寄せは街の周りに駐車場を

商店街を歩くと小さなお店がいくつも並び、それなりの賑わいはあるものの店を閉じている所も目に付いた。また開店準備中の店もあるが、問題はどのようにして維持するかだろう。瀬戸物は重いから、買い物に来る客は電車より車を選ぶ。瀬戸物の街としての魅力を高めるには、車で来るのに便利なことと思う。そのためには街の中へ車を入れずに、街の周りに駐車場を設けてシャトルバスを運行するほうがいい。

さすれば街の混雑緩和にもなり、客は駐車場を探してウロウロすることも

こんな案内も

大学も街づくり活動に参画しているようだ

ない。そのうえ古い街並みの保存もしやすくうるおいのあるバランスのとれた街づくりができる。買った商品はお店が駐車場まで運べばよい。大型店のみが駐車場を持っていても、街の活性化は難しい。このように考えるがいかがなものであろう。

深川神社. 陶彦（すえひこ）神社

　銀座通りの商店街を抜けると深川神社に着く。川沿いの通りから道の両側にお店が並ぶ、昔の屋台通りだ。こちら側は駐車禁止の看板があるも、車が数台止まっていた。この深川神社は 1200 年以上の歴史があり、陶祖藤四郎作と伝えられる陶製の狛犬があり国の重要文化財になっている。二例二拍一例でもってお参りしたあと、狛犬を探すが見当たらなかった。宝物殿に収納されているようだ。すぐ隣同じ境内に陶彦神社がある、説明の看板を見ると「瀬戸の産土神」として由緒ありとしてある。
陶祖藤四郎が参拝した折、霊験により辰巳の方向に「祖母懐」で焼き物に良い土を得たとされている。鎌倉時代に中国に渡り陶業技法を学び帰国した陶祖の加藤陶四郎左衛門景正が祀られている。4 月の第三土日には陶祖まつりが開催されている。

神社参道

重文ではない陶製の狛犬

このあと川沿いのお店で昼食をとり、窯垣の小径の駐車場まで移動した。
陶祖藤四郎が参拝した折、霊験により辰巳の方向に「祖母懐」で焼き物に良い土を得たとされている。鎌倉時代に中国に渡り陶業技法を学び帰国した陶祖の加藤陶四郎左衛門景正が祀られている。4 月の第三土日には陶祖まつりが開催されている。
このあと川沿いのお店で昼食をとり、窯垣の小径の駐車場まで移動した。

瀬戸焼きの歴史と窯垣の小径

川沿いの道を右折して、狭い路を入った所に窯垣の小径の立派な駐車場があった。

やきものの中心地洞町

やきものの町瀬戸、中でも洞町はその主力産地として栄えました。山の斜面にはいくつもの登り窯が築かれ、陶器工場の煙突からは煙がたなびき、狭い路地にも窯から出された製品を運ぶ担ぎ手さんが行き交う、にぎやかな町だった。

窯垣の小径駐車場にて、その案内図

この洞町を代表するやきものは、世界でも絶賛を浴びた「石皿」「馬の目皿」、日本の量産タイル第一号の「本業タイル」です。タイルの衰退以降は新製磁器の「ちゃわん」でした。

「本業」と「新製」の意味は

江戸時代後期に瀬戸の磁器の生産が始まり、それまで瀬戸にあつた陶器の仕事を「もともとの仕事」と言う意味で「本業」と呼び「新しく入ってきた」磁器の仕事を「新製」と呼び分けたことからついたものです。

本業タイル.....伝統的な調合による土を使い、土の表面の粗さを覆うために磁器の土を使って表面が化粧してある。
図柄の美しさとも相まって陶器でありながら、磁器のように繊細で硬質感を備えていた。

本業窯.....陶器を焼く登り窯のことで、主にすり鉢、かめなどの製品を焼いていた。
洞にある本業窯は戦後まもなく作られた、4連房のもので昭和50年代半ばまで使われていた。

瀬戸を支えた窯垣の小径

　その昔この小径こそがメインストリートであり、窯場へ通う職人さんや窯から出された製品が往来する、洞町の産業を支えた道でもありました。

窯垣とは.....　登り窯を焼くときに製品を保護するためや、効率的に窯の中に製品を詰め込むために使用した道具のことです。
柱になるツク、タナイタ、品物を入れるエンゴロ　といわれるもので数回使用後は廃棄される。
廃棄された窯垣を使った塀や壁の総称を窯垣の小径と呼び工夫して組まれた窯垣の幾何学模様は、往時を偲ぶ遺跡でもある。

駐車場を少し戻った所にある宝泉寺が散策のスタートである。750 年前に創建された曹洞宗の寺で、本尊は釈迦如来。
屋根にシャチを載せた立派な山門が迎えてくれる、境内には大きなソテツがあつた。本堂には瀬戸の陶工作といわれる天井絵があるそうだが、今回は中へは入らなかった。

味わいのある小径

　大きなムクの木をはじめ緑に包まれた散策路は、これまでの街の景色を一変させ心安らぐものがある。
そして窯垣の幾何学模様は、場所によりその姿を変えてとても楽しい散策ができる。タナイタとツクをうまく組み合わせたもの、タナイタを重ねたものなど.....さらにはそれに白壁を組み合わせた、近代的なデザインも見ることが出来る。

窯垣の小径資料館

　ここは本業タイルをつかったお風呂、トイレが残る窯元の家を改装したもので明治初期の建物である。
母屋と離れからなり、冷たいお茶のサービスもありビデオによる説明を聞くことができる。テレビはナショナルの最新式プラズマ大型画面が置かれて、和室でゆっくり瀬戸焼の歴史を勉強できる。
質問には係りのお姉さんも一生懸命に応えてくれ、一を聞けば三、四も説明してくれる。このあと本業窯を見て、赤津へ移動し赤津焼き会館を見学して帰路に着いた。
今回は瀬戸焼の歴史を学ぶことができ、窯垣の小径の散策ではその歴史に触れることができとても有意義であった。

なんともいえぬ美しさだ

竹垣との調和が絶妙のハーモニーをかもしだす

本業窯

散策中に見つけたトケイソウ